

[資料] 関東大震災写真の改ざんや捏造の事例

社団法人共同通信社写真データ部嘱託* 沼田 清

Falsified and fabricated photos of Great Kanto Earthquake

Kiyoshi NUMATA

Photo data section of Kyodo News Service, 1-7-1 Higashi-Shimbashi, Minato-ku,
Tokyo 105-7201 Japan

Photographic records of the 1923 Great Kanto Earthquake contain numbers of erroneous captions and reversed images, according to my seven-year research. But what we cannot ignore are the falsifications and fabrications, as observed in many postcards. Among the most common forgeries are smoke from fires and thunderheads triggered by fires after the earthquake. A prime example is a fabricated photo of the former Imperial Army Clothing Depot in Tokyo's Honjo district, where 38,000 people died, moments before the disaster. This is in reality is a fabricated photo in which the right-side background of a panoramic photo of evacuees in the Palace Plaza was redrawn and which described the location as the depot. I feel deeply concerned because these fabricated photos have been widely circulated even 95 years after the earthquake. As a photo editor, I would like to remind scholars of the history of natural disasters about these falsified and fabricated photos.

Keywords: Great Kanto Earthquake , falsified and fabricated photos

§ 1. はじめに

筆者は報道写真史研究の一環で 2011 年から7年にわたって関東大震災の写真調べてきた。その数は軽く千数百枚を超える。その過程で気づいたのは、震災写真には誤りが多いことだ。ケアレスミスではない改ざんや捏造(ねつぞう)写真も目についた。それらが訂正されることなく、そのまま定着して現在もお使われていることに大いなる危機感を覚えた。

本稿では、一写真編集者として、見過ごすことができない事例をできるだけ多く取り上げ、問題点を提示する。災害史研究の方々に注意喚起となればと考える。

§ 2. 調査の手順と経過

2.1 震災写真の広がり把握

2012 年、筆者は公益財団法人新聞通信調査会の企画写真展『関東大震災と東京の復興』を監修した。使用した素材は私が所属する共同通信社所蔵の日本電報通信社(電通)の写真が主である。関東大震災を発生直後から記録した約 250 枚のキャビネの原フィルムは貴重なアーカイブであり、これを手に取って見ることができるのは研究者として大きなアドバンテージである。他にも複製で約 700 枚を所蔵しているがその由来は未詳のものが多い。

翌2013年には墨田区横網町の復興記念館で震災

90周年に向けた写真展示のリニューアルを担当し、大量の所蔵写真をつぶさに見ることができた。

その後、同業他社のアーカイブや、国立科学博物館のデータベース、建築学会図書館、土木学会図書館でも所蔵写真を渉猟した。ただし両学会の写真は、建築物・構造物そのものに特化した専門的なもので報道写真には向かないと感じた。並行して、当時の新聞各紙、矢継ぎ早に発行された写真帖や画報誌、絵はがき、数年後に出た各公的機関の報告書掲載の写真を点検した。

調査に当たって意識したのは権利処理であり、追求したのは説明の正確さと画質である。初報がどこか、撮影社(者)はどこか、撮影地点と方向も精査した。写真の帰属先が絞られ、原板(オリジナル)に出会えるかもしれないという期待もあった。

2.2 宮城前広場の写真を発掘

一世紀近く前のオリジナル写真を掘り起こせるのは僥倖に近いが、実現すれば新たな進展が期待できる。

復興記念館の展示リニューアルでは、宮城前広場避難群衆のパノラマ(3枚つなぎ)を大パネルで復元した(図9)。同館に残っていた2枚の四つ切プリントと、写真集(印刷物)からの1枚を基に作製した。プリント

* 〒105-7201 東京都港区東新橋 1-7-1
電子メール:hqi4832 @u08.itscom.net

は、1931年の同館発足時に撮影社の『報知新聞』から寄贈されたオリジナルである。『報知新聞』は戦時中に『読売新聞』に統合され『読売報知』となったが、空襲で資料はすべて焼失した。本家で失われた貴重な記録が、タイムカプセルとなって復興記念館には残っている。このプリントの存在が、後述のように、被服廠跡写真が捏造であることの証拠となった。

2.2.1 掲載状況調査で知る通信社の寄与

新聞は『朝日新聞』、『東京日日(毎日新聞)』、『報知新聞』、『時事新報』、『都新聞』の在京主要紙と、主だった地方紙の9月、10月の二か月分の紙面を点検した。その結果、電通など通信社の写真が新聞紙面や出版物に大きく寄与していることが確認された。ただし当時は写真にクレジットを明記しなかったものでほとんどの読者は写真の出所を知らなかっただろう。

2.2.2 出版社へのフォトサービス

電通は新聞社向け配信以外に、並行して出版媒体にも写真を販売していた。今でいうフォトサービスである。10月4日付『東京日日』[東京日日(1923)]以下のような広告が出ている。

「弊社の写真通信 震災當日より猛火を犯し身命を賭して撮影したる天柱砕け地維裂けたる凄絶の写真幾百も揃えてあります

完全無比の写真室も出来上がりました 写真製版も出来ます ドシドシ御用命を願ひます

丸ノ内仲通十號館電車通りより横に三軒目

世界三大通信社 日本電報通信社」

版下の製作もできるのだから零細業者には便利だっただろう。その顧客には絵はがき出版業者もいた。

2.3 絵はがき出版の繁昌

当時の出版媒体の一つとして無視できないのが絵はがきである。東京・神田の絵はがき出版店、尚美堂の社史『尚美堂 80年・田中貞三聞き書き』[尚美堂(1977)]は、震災絵はがき製作の内情と繁盛ぶりを次のように伝えている。田中貞三とは二代目社主である。

神保町の三階建社屋は崩壊、住居も類焼したが「一夜明けた翌日、取引先の光村原色版印刷所の世話で麻布・広尾に仮寓を定め、営業を再開した。営業再開といっても商品はすべて焼失。幸いにも貞三が所持していた、イーストマン・コダックの写真機(ポスト版)とフィルムを活用した。貞三は毎日、カメラを肩に、市内を駆け巡って震災後の生々しい光景を写し回った。二

重橋前、日比谷、丸ノ内、銀座、そして浅草にも出かけた。もともと惨状を呈した本所の被服廠跡にも足を伸ばしてパチリパチリとカメラにおさめた。

さらに電通からも写真を借り受け、貞三の撮影したものに加えて銅版一色刷りの絵はがきを作製」。

「印刷はもちろん光村印刷所である。でき上がっても断裁屋が居ないので、八面つきのまま、一枚で小売価格が十銭、卸で六銭だったが、とにかく新聞社の写真とかニュースなどの類がなかなか出なかったために、それが出るまでの間、約20日間は、文字通り羽根が生えて飛ぶような売れ方で、製造に追いかければなしの状態だった。遂には仕入れ客や直接の購入客を整理するために、竹矢来をくんで、家屋の損傷を防いだというウソのような本当の話もあり、しかも広尾近辺の人々が、あまりの商売繁盛を妬んで、光村印刷所に放火するという事件まで生じたほどだった。」

§3. 写真の誤りは画像と説明の両方で起きる

次に写真の誤りについて考察したい。報道写真は、確かな画像と正しい写真説明が備わって初めて成り立つ。説明次第で白が黒にもなる危うさを常に抱えている。学術写真でも同様と考える。

1923年当時の写真説明は、媒体により程度の差はあるが、全体に現代の基準である5W1H(いつ、どこで、だれが、なにを、どうした、どのように)を備えているのは少ない。記事と一体の掲載ならそこから要素を補えるが、写真単独の掲載では難しい。読者をミスリードしたり、不消化感を残さないために「いつ、どこで、だれが、どうした」は最低限欲しいところだ。

3.1 キャプションの誤り

例えば、震災当日、東京上空に現れた不気味な入道雲の写真(図1)がある。これは西大久保在住の岩井貞麿という人が、9月1日の午後4時過ぎ、自宅から東の東京市中心部方向を撮影したものだ。

怪雲と洋館(実は修養団体「希望社」本部の建物、図3)の対比が異様な雰囲気を出していて、震災関係の著作の巻頭写真などに引用が多い。9月24日付の『都新聞』[都新聞(1923)](図2)や、雑誌『科学画報大震災号』[原田三夫(1923)]の10月1日号には正しく掲載された。『震災予防調査会報告第百号(戊)』[今村明恒(1925)]の「火災旋風當時に現れた雲色々」では、岩井氏から聴取した自宅と洋館の距離、高さ、方位などの撮影データを示し、雲の仰角が割り出せるまでに記述していて、さすがである。

しかし内務省社会局編『大正震災志写真帖』[内務省社会局(1926)]に撮影者名が欠落したまま「麻布三井邸付近より見たる震災當夜の入道雲」として掲載されたところから、誤ったまま流布されてきた。中島陽一郎の『関東大震災』[雄山閣(1973)],石井敏夫・木村松夫の『絵はがきが語る関東大震災』[柘植書房(1990)]でも「麻布三井邸」と誤っている。



図1 西大久保の岩井貞麿が1923年9月1日午後4時ごろ、自宅から撮影した東京市上空の入道雲
Fig.1 The photo of thunderheads over Tokyo city triggered by fires after the earthquake taken by Sadamaro Iwai at Nishiokubo of Tokyo at 4 pm on Sept. 1 in 1923.



図2 岩井貞麿撮影の入道雲の写真を掲載した1923年9月24日の『都新聞』
Fig.2 Miyako-simbun on Sept. 24 in 1923 carried the photo of thunderheads taken by Sadamaro Iwai

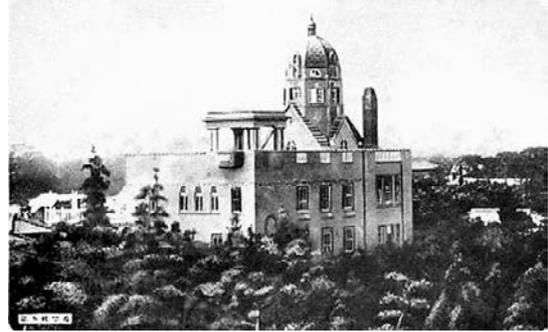


図3 岩井の写真に写っている洋館は西大久保の修養団体「希望社」の本部建物(絵はがき)
Fig.3 The house taken in the Iwai's photo was the office building of Kibosha in Nishiokubo(a postcard)

当時の建築物の耐震性能の差を示すため、丸の内界隈で被害の軽重を対比した写真がある。その一つ、左手前に日本郵船ビルを写し、後方に丸ビルを取り入れた写真が、2年半後に発行された『大正震災志写真帖』[内務省社会局(1926)]では、「破壊せる海上ビルディングと丸の内ビルディング」と誤った説明になっている(図4)。丸ビルと海上ビルは広い道路を挟んで、



図4 内務省社会局編の『大正震災志写真帖』が日本郵船ビル(左)を海上ビルと誤って掲載した写真
Fig.4 The photo carried by The Social Affairs of The Home Ministry. The caption mistook Nihon-Yusen Building(left) for Kaijo Building.

なおかつ1ブロックずれて位置しているので、このようには写らない。ビル名が違うだけでなく、海上ビルに被害があったとしている点で二重に誤っている。これが『1923 関東大震災報告書 第1篇』[中央防災会議

(2006)]で誤ったまま引用されてしまった.この写真の原板フィルムは共同通信に残っている.

3.2 画像の裏焼き

震災直後の出版では,写真の焼き付けや製版時に画像の裏焼き(鏡像反転)が頻発した.

9月15日,報知新聞が他社に先駆け発行した画報誌『大正大震災写真帖』[報知新聞(1923)]は,表紙の「浅草十二階(凌雲閣)」からして裏焼きである(図5,6).



図5(左),図6(右)八階付近で折れた浅草の十二階(凌雲閣).左は裏焼きで,右が正しい像
Fig.5(left), Fig.6(right) The photo of broken-off Ryounkaku,12storied tower in Asakusa. The left is reversed image, the right is correct one

さらに「青山附近の震害」,「惨憺たる日本橋附近(※「京橋附近」の誤り)の焼跡」(図7の上部のカット)と,「飛行機で写した東京の焼跡」(図7の下部のカット)も裏焼きだ.空撮写真は,三崎町を手前に水道橋,遠景に本郷の帝国大学,右上奥に上野の不忍池を写したものだが,なかなか場所の特定ができなかった.陸地測量部の『震災地応急測図原図』と照合して初めて裏焼きと分かった.1ページそっくり裏焼きなので製版段階で起きた間違いだろう.

その後大量に出回った震災絵はがきにも裏焼きが散見され,当時の混乱ぶりがうかがえる.



図7(上),8(下) ページの上部は日本橋附近(正しくは「京橋附近」)の惨状.下部は東京の三崎町,水道橋,本郷エリアの空撮写真.図7(上)は裏焼き,図8(下)が正しい像
Fig.7(upper),8(lower) The upper image of the page is devastated Nihombashi(it is wrong, Kyobashi is correct), The lower image of the page is an aerial view of Misakicho, Suidobashi, and Hongo area in Tokyo City. Fig.7 is reversed image , Fig.8 is correct one.

3.3 改ざんと捏造

看過できないのは改ざんと捏造である.改ざんとは,元にないものを描き足したり,実際に写ったものを消したりして部分的に改変すること.

捏造とは,画像を改ざんし,さらにキャプションを別物に書き替え,本来なかったものを作り出すこと.このような行為はアートの世界では創作として許されるが,報

道や学術の世界では厳禁である。

3.3.1 改ざんと捏造の実例

例えば「本所被服廠跡避難の群集是が哀れ白骨の山と化すとは」と書かれた絵はがきがある(図 11, 復興記念館蔵). 広場を埋める大勢の避難者. 遠景には

舞い上がる火煙. 実はこれは, 報知新聞が宮城前広場に避難した群集を撮影した 3 枚組パノラマ写真(図 9)の右部分(図 10)で, 背景の宮城と森を火煙に描き替えたものだった. 筆者が 2013 年にこのパノラマを復元して気付いた.



図 9 報知新聞が震災当日か翌朝に撮影した宮城前広場に避難した群集のパノラマ(東京都慰霊協会提供)
Fig.9 A panorama of the thousands of evacuees in the Imperial Palace Plaza taken by Hochi-Shimbun on Sept.1 or 2 in 1923(by courtesy of Tokyo Memorial Hall)



図 10 図 9 のパノラマの右部分
Fig.10 The right part of Fig.9



図 11 図 10 から捏造した被服廠跡惨事直前の絵はがき

Fig.11 A postcard that was fabricated from Fig.10 and labelled as the former Imperial Army Clothing Depot (Hifukushoato) just before the disaster



図 12 図 10 から捏造した被服廠跡惨事直前の絵はがきの別種(田辺修一郎氏提供)
Fig.12 Another postcard that was fabricated from the Fig10 (by courtesy of Mr. Shuichiro Tanabe)



図 13 中央气象台報告書掲載の捏造被服廠跡写真
Fig.13 The fabricated photo labelled as Hihukushoato just before the disaster, carried on the official report of Central Meteorological Observatory

同様に「上野駅前を埋め尽くす避難群衆」(図 14)を、右後方に写るドーム屋根の下谷区役所を両国国技館に見立てて、背景を描き替え「本所被服廠跡將に猛火襲来惨劇前の群集」とした絵はがき(図 15)もある。



図 14 上野駅前を埋め尽くす避難群衆.右奥のドーム屋根は下谷区役所
Fig.14 Crowd of evacuees in front of Ueno Station. The house with dome roof in the right rear is the Shitaya ward office.

同じ上野駅前の写真で、図 16 は、図 17 の有楽町の東京電燈炎上の猛煙を切り取り、鏡像反転させて張り付け、絵柄を派手に見せた改ざんである。



図 15 図 14 の下谷区役所を両国国技館に見立てて、被服廠跡惨事直前の写真に捏造した絵はがき
Fig.15 A fabricated postcard from the image of Fig.14. It is labelled as Hihukushoato in Honjo



図 16 上野駅前を埋め尽くす避難群衆.背景の煙は有楽町の東京電燈炎上の写真(図 17)から切り取り、裏返して張り込んだもの
Fig.16 Crowd of evacuees in front of Ueno Station. Smoke at the backdrop is collaged image. It was cut out from the photo of Fig.17 and reversed.



図 17 震災後、炎上する有楽町の東京電燈
Fig.17 The office of Tokyo Dento in Yurakucho is blazing up after the Earthquake

また,9月18日に摂政宮(後の昭和天皇)が東京市内被災地を巡視し,銀座を通過する場面(図18)は,街灯をコラージュしている.銀座を示すランドマークとして取り入れたのだろうが,街灯の輪郭が不自然なほどに鮮明で,街灯に影が無いことから改ざんと判明した.撮影社(者)は不明だ.同一写真でも,背景に荷馬車や自転車があるものも存在する.



図18 9月18日,被災地巡視で銀座を通過する摂政宮(後の昭和天皇).銀座らしさを出すため街灯を切り貼りしたが,その街灯には影が無い.

Fig.18 On Sept.18 in 1923 Regent Hirohito making the round in Ginza street. The street light was collaged to emphasize that it's Ginza.

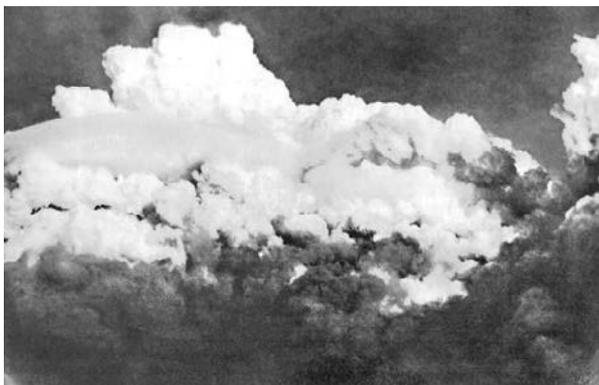


図19 地震発生当日,東京市上空に発生した入道雲(岡田紅陽撮影/東京都公文書館所蔵)

Fig.19 Thunderheads over Tokyo city on Sept. 1 taken by Koyo Okada(owned by Tokyo Metropolitan Archives)

震災発生時の正午2分前で止まった時計が印象的な中央气象台の風力塔.それを岡田紅陽が撮ったとされる「番町方面より観たる火煙」[東京府大震災寫真帖(1923)](図19)にコラージュした合成写真もある(図20).写真的にインパクトがあり,ノエル・F・ブッシュの『正午二分前』[早川書房(1967)]の表紙に採用された.だが拡大してみると風力塔の観測機器が宙に浮いていて,張り付けた写真と分かる.



図20 地震発生当日の入道雲(図19)に中央气象台の風力塔を張り込んだ合成写真

Fig.20 A composite photo of thunderheads(Fig.19) on Sept.1 and the tower of observing wind-force at Central Meteorological Observatory in Tokyo.

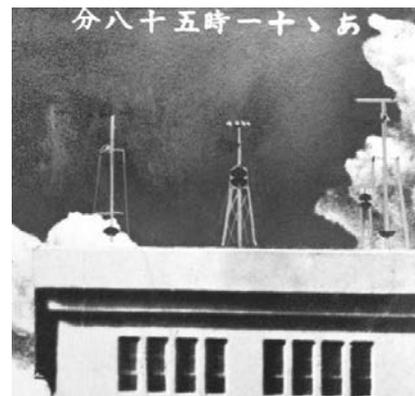


図21 図20の風力塔上部のクローズアップ.観測機器が宙に浮いていて合成写真であることが分かる.

Fig.21 Close up of Fig.20. A meteorological equipment is floating in the air, that shows this is a composite photo.

当時の東京のランドマークの一つで、8階で折れた浅草の凌雲閣を入道雲に張りつけた合成写真もある。

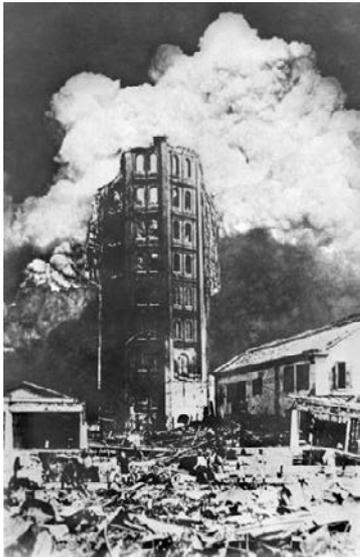


図 22 入道雲の写真に浅草の凌雲閣をコラージュした合成写真。

Fig.22 A composite photo of broken-off Ryounkaku tower in Asakusa and thunderheads.

3.3.2 改ざんと捏造の手法

改ざんと捏造は、画面の要素として煙や雲を取り込んだ合成が多い。同じ場所を撮ったものでは煙が薄いのが本物で、煙が空一面を覆っているのは細工が施されているとみて間違いない。气象台や十二階などのランドマークを入道雲に張り込んだ写真は、シンボリックな素材二つが合体し、異様感をそそり、緊迫したムードをかきたてるのに成功している。

合成の技法としては次の3通りがある。

- 1, 描くーエアブラッシュや修正筆で描き加えたり、描き替える
- 2, 切り張りーカミソリと糊で切り張りし合成する
- 3, 焼き込みー暗室作業で、複数のネガから1枚の印画紙に必要部分を露光し合成する

背景だけでなく、手前と中景にも炎や煙が上がっているのはいかにも稚拙で、一目でインチキ写真と分かるが、手の込んだ細工のものは素人では気付かない

3.3.3 捏造はなぜ起きたのか

改ざんは写真的効果を上げるため、修正や強調を施すものだが、捏造は要するに「でっち上げ」である。報道に携わる人なら後ろめたさを感じて他人には言えるものではなく、事情を詳らかにした記録も見た事が無い。

38,000 人が死亡した被服廠跡の写真は編集者な

ら最優先に入手したいと考えるものだ。しかし惨事直前の写真は無く、災後の累々たる死体の山の写真にならざるを得ないが、9月5日、各社に先駆けて発行を再開した報知新聞が「あゝ凄惨！本所被服廠跡の屍体の山」との説明で掲載したら、たちまち警察当局から発売禁止処分を受け1349部が差し押さえられた。新聞紙法第23条による「安寧秩序を紊すもの」としての摘発であった(『大正大震災火災誌』警視庁(1925))。

9月5日に福田雅太郎戒厳司令官名で戒命第三号が発令され「時勢ニ妨害アリト認ムル集会若ハ新聞紙雑誌広告ヲ停止スルコト」と警察関係に通達されていた(『関東大震災の治安回顧』吉河光貞(1949))。

報知の処分を聞いて以後、表向き死体写真は出せなくなり、闇で出回るようになった。そんな状況下で、報知新聞の宮城前広場避難群衆写真を改ざんした被服廠跡の捏造写真が登場した。無いものねだりの行き着く先が捏造であったといえる。

3.3.4 誰が改ざん・捏造をしたのか

では、誰が改ざんと捏造をしたのだろうか？被服廠跡の捏造写真は新聞と、新聞社発行の出版物では見つからない。売れ筋を見込んだ絵はがき業者が、捏造したと思われる。確認できた範囲では、背景の火煙が左下から右上に上がっているもの(図11)と、逆方向(図12)の2種類がある。画像が同じでも、説明の字句や活字を変えた数種類があることから、数軒の業者が版下を使い回したと想像される。出版元を明記した捏造絵はがきはまだ見たことがないが、震災絵はがきのセットを納めた袋に「松本幸盛堂」と印刷されたものを新潟県三条市のコレクター田辺修一郎氏が所蔵している。なお業界大手の尚美堂の社史には捏造への言及は全くない。

それでも、震災写真の改ざん・捏造の全てが絵はがき業者の仕業とは決めつけられない。3.3.1で示した摂政官の銀座通過の写真(図18)は、撮影翌日には新聞に掲載されているので、改ざんが通信社や新聞社でも行われていた可能性が高い。

ほかにも、注意深く見ていくと、有楽町の東京電灯炎上の猛煙(図17,25)が、震災直後の日比谷交差点の写真(図23)や、日比谷交差点内で立ち往生した市電の写真(図26)にそれぞれコラージュされ、図24と図27が作成されたことが分かって来た。

とくに、日比谷交差点から数寄屋橋方向を撮った写

真は,単純な印画の切り張りではない.毎日通信社が撮った交差点の写真を複写して台となるネガを作り,暗室作業で2カットのネガから,覆い焼きや焼き込みの技法を駆使して二重露光でプリントを作成しており,猛煙を撮影した電通の関係者が加わっている可能性を示唆している.

紹介した通り,猛煙が空一面を覆う有楽町の東京電燈炎上の写真(図17,25)は,電通の撮影で,震災後発生した火災の猛威を示す貴重な記録である.共同通信社に残る原板フィルムには加工の痕跡は見当たらず,実写写真である.もう1カットのオリジナルプリントが神奈川県立図書館に所蔵されている.



図23 震災直後の日比谷交差点.右奥が数寄屋橋方向.

Fig23 The scene of Hibiya intersection just after the Earthquake. The street on the right in the back leads to Sukiyabashi



図24 図23の火煙を強調するため,図25の東京電燈炎上写真の煙を暗室作業で焼き込んだもの(東京都慰霊協会提供)

Fig24 Falsified photo of Hibiya intersection. The smoke at the backdrop is cut out from Fig.25 and collaged through darkroom works to emphasize the smoke. (by courtesy of Tokyo Memorial Hall)



図25 炎上する有楽町の東京電燈

Fig.25 Blazing office of Tokyo Dento in Yurakucho



図26 倒壊した日比谷交差点前の幸楽と立ち往生した市電.左奥は日比谷公園.

Fig.26 Devastated Hibiya intersection. The restaurant Koraku was collapsed and a streetcar got stuck. On the left in the back located Hibiya Park.



図27 図26の煙を強調するため,図17の東京電燈炎上の煙を貼りつけたもの(東京都慰霊協会提供)

Fig.27 The smoke at the backdrop was cut out from the photo of Fig.17, and collaged on Fig.26 .

(by courtesy of Tokyo Memorial Hall)

§ 4. 捏造写真の被害例

捏造写真を被服廠跡の例で探すと、当時の新聞には無く、専ら絵はがきや新聞社系以外の出版物に見られる。それらを引用した被害例の一端を紹介する。

4.1 宮武外骨の『震災画報』

1924年1月15日、宮武外骨は『震災画報』第5冊に、図13と同一の「本所被服廠構内惨劇の一瞬前 九月一日午後二時頃」の説明が書き込まれたものを掲載した。画像は不鮮明だ。

4.2 中央気象台の『関東震災調査報告』

1924年8月、中央気象台は、『関東震災調査報告—気象編』[中央気象台、藤原咲平(1924)]に「第十八図(乙) 渡邊氏調査付図」として、前掲の宮武外骨著『震災画報』第5冊と同一の写真(図13)を掲載した。「篤志家、渡邊金三氏の提供」という。

渡邊金三はサンフランシスコ在住で、在米日本人会の参事を務め、後に『日米非戦論』を著した人。上記報告書によれば、一時帰国時に震災に遭遇し、隅田川を挟んで対岸から被服廠惨事を遠望したという。独自に、惨事で生き残った人の聞き取り調査を行い、報告書にして写真2枚を添え中央気象台に提出した。中央気象台はこれを全面的に受け入れている。

4.2.1 渡邊金三提供写真の信ぴょう性

渡邊は篤志家であり善意の人かもしれないが、写真に関しては素人で、吟味する眼力はなかったと思われる。入手した写真を疑った気配はない。

彼が添付したもう一枚の写真は「第十八図(甲) 東京本所被服廠構内の避難者惨劇の一瞬前」で、水道管が破裂し出水騒ぎの中でも避難できてホッとしている女性たちの姿が写っている(図28)。中に石原小町とうたわれた美人が写っているとして流布した。



図 28 中央気象台報告書が掲載した被服廠跡の避難者と称する写真

Fig.28 The photo labelled as refugees at Hihukushoato just before the disaster, carried on the official report of the Central Meteorological Observatory.

確かにノエル・F・ブッシュの『正午二分前』[早川書房(1967)]には被服廠跡の生き残り者の証言として、惨事の前に新聞社と思われるカメラマンが来ていたと記している。しかしこの写真の出所は不明である。写っているのが惨劇前の被服廠跡や石原小町本人とする裏付けはない。もし本当であれば、撮影者やその所属社は、撮影の状況と、どのようにして被服廠跡から脱出し、写真を世に出せたのか、記事や手記が発表されていてもよいはずだが、いまだに見つからず、筆者の疑念はぬぐい切れていない。

4.3 吉村昭の『関東大震災』

1973年夏、資料の吟味では定評のある作家吉村昭は、小説『関東大震災』[文芸春秋社(1973)]を書いた。公的機関の発行物ということで信用したのか、中央気象台の報告書に掲載された2枚の写真(図13、図28)をよりどころにして、その第6章「本所被服廠跡・三万八千名の死者」を次のように展開した。ただし著書には写真を一枚も掲載していない。

—当時、中央気象台に詳細な調査資料を提供した篤志家渡邊金三の資料の中に、不気味な二葉の写真がおさめられている。それは、誰が撮影したのか明記されていないが、惨事の起こる直前の被服廠跡の写真なのである。

その一つの写真には、荷物に腰をおろしている婦人たちの姿が映しだされている。前夜来の雨で地面には水が溜り、後向きになった少女は裾をからげている。画面の左部には、嬰兒を背負った和服姿の女性が立っているが、彼女たちの顔には、安全な場所に避難できた安らぎの表情が一樣に浮かんでいる。

他の写真を目にした私は、思わず背筋の冷えるのを感じた。

その写真には「本所被服廠構内惨劇の一瞬前」として、九月一日午後二時頃撮影と付記されている。

写真には、人と家財に埋もれた構内が映し出されている。荷を高々と満載した大八車が随所にあり、その間隙に荷物と人がぎっしりとつめこまれている。洋傘や番傘が所々に見え、その下で人々が陽光を避けて坐っている。

カンカン帽をかぶった男たち、和服姿の少年少女、手拭を姉さんかぶりにした女たちが無数に見える。二万坪の構内に四万名の避難者が殺到していたことから考えて、一坪に二名の人間がいた計算になるが、その他馬車、大八車、家財等が運び込まれていたわけだから、立錫の余地もない状態であったのだ—

しかし写真が捏造と判明して、この記述は成り立たなくなった。吉村は2006年に死去したが、事実を知ったら悔しがったに違いない。

4.4 石井敏夫の『絵はがきが語る関東大震災』

1990年、柘植出版発行の石井と木村松夫の共著は、

震災後出回った絵はがきと実プリントを幅広く紹介し解説した本格的な写真集である。裏焼きやキャプションの誤り、改ざんなどの存在は言及しているが、捏造について明確な指摘はない。

問題の写真は同一図柄でカラーとモノクロの2種の絵はがきを掲載している。カラーの説明は「丸の内へ避難せる群衆日本橋及神田方面を望む」。被服廠跡としていないので、捏造とは言えない。モノクロは「本所被服廠後(ママ)惨害前の避難民」となっていて、明らかに捏造である。2枚はページが離れて掲載されているが、著者は、どちらかがインチキと気付かなかっただろうか？

その後、この写真集からの引用・転載は多く、二次被害を生み出している。

4.5 海外にも波及

被害は海外にも波及している。米国の視覚文化研究者 Dr. Gennifer Weisenfeld の『Imaging Disaster』[University of California Press(2012)](邦訳は『関東大震災の想像力』[青土社(2016)])は石井の著書から前掲の2枚を転載し、同じ轍を踏んでしまった。しかも、被服廠跡としたものがオリジナルで、丸の内としたのが捏造物と勘違いしている。筆者は2017年暮れ、パノラマ写真を添えて著者に通知したところ、驚いていたが、感謝された。

4.6 江戸東京博物館の展示

2015年10月、江戸東京博物館でも展示していたが、筆者が誤りだと指摘し、程なく撤去された。

§ 5. おわりに

7年間に及ぶ震災写真の調査で見えてきたのは、ケアレスミスによる誤りと、改ざんと捏造の多さだ。権威としてよりどころにされる気象台や内務省の発行物も、写真の吟味に関しては心もとない。

誤りの固定化と、被害者が、知らぬ間に新たな被害を生み出す構図がある。今、私たちにできることは、誤りの連鎖を断ち切ることだと思う。

2023年には関東大震災から百周年を迎える。新聞・テレビの特集記事や出版、企画展が多くなると予想されるが、折角の記事、論文、著書が、引用写真に間違いや捏造があったのでは「玉に瑕」となってしまう。

とにかく、間違いが判明した写真は使わないこと、これに尽きるのではないか。やむなく引用する場合は張り込みや合成があることを明記することが大切だ。

ちなみに両国の復興記念館では宮城前避難群衆の

大パノラマの脇に、捏造絵葉書の写真も注釈つきで掲示して注意喚起している。

謝 辞

匿名査読者の指摘と助言は本稿改善に有益でした。感謝します。

素材資料の閲覧と複写の便宜を与えていただいた東京都慰霊協会、防災専門図書館、東京都公文書館、三条市の田辺修一郎氏に感謝します。

文 献

石井敏夫・木村松夫,1990,絵はがきが語る関東大震災,柘植書房,Ⅱ大火発生の中表紙,35

石井敏夫・木村松夫,1990,絵はがきが語る関東大震災,柘植書房,13,88

今村明恒,1925,震災予防調査会報告第百号(戊),火災旋風同時に現れた雲色々,217

岡田紅陽,1923,東京府大震災写真帖(1923)

警視庁,1925,大正大震災火災誌,521

ジェニファー・ワイゼンフェルド,2016,関東大震災の想像力,青土社

Gennifer Weisenfeld, 2012, Imaging Disaster, University California Press

尚美堂,1977,尚美堂80年・田中貞三聞き書,37-39

中央防災会議,2006,1923 関東大震災報告書第1編,134-135

東京日日,1923,10月4日の広告

内務省社会局,1926,大正震災志写真帖,14

中島陽一郎,1973,関東大震災—その実相と歴史的意義,雄山閣,中表紙

ノエル・F・ブッシュ,1967,正午二分前,早川書房,98

原田三夫,1923,科学画報大震災号,新光社,691

藤原咲平,1924,関東大震災調査報告—気象編,中央気象台,

報知新聞,1923,大正大震災写真帖,

都新聞,1923,東京上空の怪雲

宮武外骨,1924,震災画報第5冊,半狂堂

吉河光貞,1949,関東大震災の治安回顧,法務府特別審査局 196-197

吉村昭,1973,関東大震災,文芸春秋